

江戸城に送られた設楽の木材

はじめに

設楽町の高峰段戸山は江戸時代から現在に至るまで、幕府が管理し、現在は営林署が管理するいわば国有林であります。現在では山の殆どが伐採の後に植林された林になっていますが、江戸時代は天然木に覆われた美林でした。

元和六年(一六二〇)段戸山より幕府は、江戸ご用木として大小三二〇本の用材を百姓に山から出させ、川流しにより渥美湾に運び、船で江戸まで引いて行ったことが記録にあります。

それ以後一六三年を経た、天明三年(一七八三)徳川十代將軍家治の時、江戸城二ノ丸が火災で炎上し江戸中が大騒ぎとなりました。幕府は直ちに二ノ丸再建のための用材の調達に取り掛かりました。遠く三河の段戸山に良材が豊富にあることは、毎年報告される各村からの指出帳で把握されていましたから、ご用木係の頭として「堀某」を指名しました。「堀某」は有難くお受けし、江戸を出発するにあたり、日頃信仰していた上野の不忍池しのぶのいけの弁財天に参詣して、「なにとぞこの大役を無事果たさせて下さ

い」と祈願してから、弁財天のお札を授かり、大切に持参して出発の準備をしました。

出発に際し下役人数人を従え、江戸を出ることになりました。

東海道を幾日もかけて吉田の宿、今の豊橋に至り、豊橋から豊川を登り、寒狭川を経て田峯にたどり着きました。

田峯に着くと同時に、用材の伐採から木材の選別と、人足集めに取り掛かったものと思われる。

田峯村は申すに及ばず、近郷近在から多くの人足を調達し、選別された桧や榎さわらなど大量の用材が伐り出され、急峻な流れの川に運び出された木材は、川を堰き止めてダムのように水を溜め、浮き上がっている木材を、

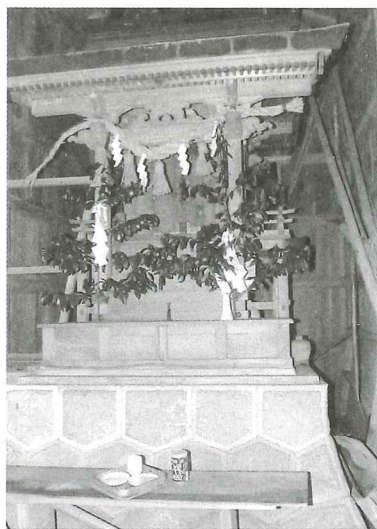
一気に堰を崩して次に溜めたダムの中へと流し込む、こうした方法で下流に送り出す事により比較的木材は壊れにくいと言う昔の知恵でありました。

支流をこうした出し方で寒狭川にたどり着くと、ここからは

小型の筏にして豊川を下り、渥美湾に運んだものと考えられます。

こうした川出しが行われたので、海難を避けるために祀られている金毘羅様が、時々山の中に見られるようになった原因です。

さて、こうして大量の用材を長い道のりを江戸城に運ぶ事が出来た「堀某」は、一人の怪我人も出さず無事伐採から搬出までを順調に作業が運ばれたのは、ひとえに日頃信仰していた不忍池の弁天様のお蔭に他ならないと、その年の十一月紅葉に包まれた川の中の小島を見て、是非此処にお林鎮護のため、不忍池弁財天分霊をお祀りしようと、石祀を後にして江戸に帰ったと言われます。



それ以後、幾星霜いくせいそう一四八年を経た昭和六年(一九三二)、時の帝室林野局新城出張所段戸山三

橋担当区主任技手「石橋二郎氏」他伊藤藤清四郎、伊藤紋吉その他大勢の人が発起人となり、かの小島に在った樹齡數百年を経た桧の大木の払い下げを申請し、許可を頂いてその桧で堂宇を建立し境内の整備をして、昭和七年(一九三二)四月盛大な遷座供養を行いました。



現在ではその堂宇の周りには天然木の美林は跡形もなくなつて、人工林が取り囲むように生い茂り、シーンと静まり返つた中で、川の流れの音だけが静かに昔を偲んでいます。一度訪れて昔を思い浮かべて見ては如何でしょう。

(設楽町文化財保護審議会委員

今泉 宗男)